土　岐　市　教　育　研　究　所
ＴＥＬ　0572-54-1111（内373）
ＦＡＸ　0572-55-6310
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　kyoiku@city.toki.lg.jp
所　報　Ｎｏ.５６６
発行責任者　所　長　河　合　広　映
発　行　日　令和4年 11月 22日
題　　字　山　田　恭　正　教育長

『思いをのせて』

撮影　泉中学校
阿部　聖一先生

がんばる木こり

土岐市教育研究所長　河合　広映

昔々、一人の木こりが材木屋に仕事をもらいにいった。申し分のない条件だったので、木こりは仕事を引き受けることにした。

最初の日、木こりは親方から斧を一本手渡され、森の一角を割り当てられた。男はやる気満々で森に入った。その日は、一日で１８本の木を切り倒した。

「よくやった！この調子で頼むぞ！」親方の言葉に励まされた男は、明日はもっと頑張ろうと誓って早めに床に入った。

次の日、男は誰よりも早く起き、森に向かった。ところが、その日は努力も虚しく、１５本が精一杯だった。「疲れているに違いない。」そう考えた木こりは、日暮れとともに寝床に入った。

夜明けとともに目を覚ました男は「今日は何としても１８本の記録を超えるぞ。」と自分を奮い立たせて床を出た。ところが、その日は１８本どころかその半分も切り倒せなかった。次の日は７本、そのまた次の日は５本、そして、最後には夕方になっても２本目の木と格闘していた。

何と言われるだろうとびくびくしながらも、木こりは親方に正直に報告した。「これでも力の限りやっているのです。」親方は彼にこう言った。「最後に斧を研いだのはいつだ？」

男は答えた。「斧を研ぐ？研いでいる時間はありませんでした。何せ木を切るのに精一杯でしたから。」

木こりは、目の前の木を切ることに精一杯で、「斧を研ぐ」という大切な仕事をおろそかにしていました。斧は研がなければ、刃こぼれを起こし、性能はどんどん低下します。親方は、木を切る本数が日に日に減っていくことを聞いた時、すぐに、その原因が斧にあることを見抜いたのでしょう。寓話は、その物語の事実だけではなく、何かをたとえたり、教訓を与えたりしている場合があります。そう考えたとき、親方の言った「斧を研ぐ」こととは、私たちの仕事に例えるとどういうことだと考えられるでしょうか。木こりは木を切るプロです。そのプロの仕事を支える道具をおろそかにしたことで、効率も落ち、成果も落ちていったのです。でも、木こりからしてみれば、「自分は精一杯やっている」のです。成果を上げようと目の前のことだけに一生懸命になりすぎると、何か大事なことを見落としているという教訓にも聞こえます。

教師もプロです。教師にとって「斧を研ぐ」こととはどういうことでしょうか？自分は一生懸命にやっていると思っていても、なかなかうまくいかない時、なかなか成果が表れない時はあるものです。身近に親方のような人がいればいいのですが、なかなかそんなに都合よくはありません。そんなときは「斧を研ぐ」ことを忘れているのだと思い返してみることが大切です。一概に、教師の「斧を研ぐ」定義を述べることはできませんが、授業以外の時間や、勤務時間以外の時に何かやるべき（やっておいた方がいい）ことがあるかもしれないと考えてみることも大切だと思うのです。

保護者との相談から見えてくるもの

～　特別な支援を必要とする児童生徒の現状　～

教育総務課　教育相談アドバイザー　永冶　洋子

教育総務課にお世話になって４年目を迎えています。教育相談という仕事には枠がなく、相談内容が多岐に渡り、年々増加しています。その中でも、相談件数が特に多くなっているのは、特別支援に関する相談です。特別な支援を要する児童生徒に対して、多くの支援が行われるようになったことや、社会に広く認知されたりしたことが背景にあると思います。

土岐市においても、令和４年度からは中学校通級指導が始まり、市内の児童生徒の約３パーセントが通級指導教室を利用しています。特別支援学級に入級している児童生徒を加えれば、約５パーセントの児童生徒が特別な支援を受けていることになります。

今特に力を入れているのは、令和５年度に小学校に入学してくるお子さんの就学に関わる相談です。

土岐市では６月末から各園に巡回相談を実施しています。訪問では、簡単な構音検査・集団生活の様子を観察・園との懇談が主な流れですが、通級指導の担当教諭を中心に、特別支援学校の地域支援センター長・東濃圏域発達障がい支援センターの相談員・療育センターの相談員等多くの方々の視点からお子さんを観させてもらっています。今年度は１１園の訪問で９１名のお子さんが対象でした。その内約半数の保護者の方々に７月末の教育相談会に来ていただいて、適正な就学場所についての相談を行いました。

教育相談会の目的は、保護者の思いや考えをお聞きし、お子さんの様子を改めて観ることで、適切な就学場所を考えていくことです。その会においても巡回相談と同じく、多くの関係機関からアドバイスをいただけるようにしています。

教育相談において難しいのは、その子の特性をどう捉えるかです。発達に何らかの特性がある子と愛着に問題がある子は、集団生活の中で似たような不適応行動を現します。その子の特性に応じた支援を考え、実践することで随分落ち着いてくる子もいます。

例えば、中学校の通級指導では、ＳＳＴ（ソーシャル　スキル　トレーニング）だけでなく、「お話タイム」の時間を設け、テーマを決め自分の事を話したり、「聞くトレーニング」の時間を設け、聞く力を伸ばしたりする事に力を入れています。

現在通級教室に通っているお子さんが「通級指導教室は、自分にとっての居場所であり、唯一安らげる場所」と言っていたことがとても印象的でした。どの子も「困っている」がどうすれば解決するのかが分からない子がほとんどだと思います。私たちは改めて特別な支援をどう捉え、どう支援していくかを担当者だけに任せることなく、学校体制で考えていく必要があると痛感しています。もちろん、教育委員会もどう支援していくか、何ができるかを、今一度考える時だと考えています。

通常学級に在籍しているお子さんにも同様に、何かしらの困難さや生きにくさを感じている子は多いと思います。私たちは子どもたちにも保護者にも理解を求める事に力を入れてきましたが、これからは、支援や援助に対して納得していただく事が大切だと考えます。そのためには、支援する側からの丁寧な説明と何が困難なのかをきちんと理解する力が必要であると思います。

【校長室の窓】

大切にしたいこと

駄知中学校長
東山　学史

はじめに

平成３年から始まった私の教師生活の中で、これまで多くの児童生徒、保護者、同僚、諸先輩方とかかわらせていただき、様々な経験から学び培われてきた「信念」がいくつかあります。そして、令和３年より校長という最も責任ある役割を担うことになり、日々その重さを実感しながらの毎日ですが、学校生活の中で様々な判断に迫られたときは、一度立ち止まってこれらの言葉を思い浮かべながら熟考し、自分なりに正しいと判断したことを実行するようにしています。私が教師としてこれからも大切にしたいことを述べさせていただきます。

「命や健康が第一」

私が昨年4月に新任校長という職務を授かり、駄知中学校に赴任した時は、すでにコロナ禍で感染防止を最優先にした学校経営が求められていました。学校生活でどんな行動制限が必要か、授業参観はどうするのか、そして体育大会、修学旅行はどうするのか･･･。すべての教育活動に対してやるか、やらないか、常に決断が迫られていました。そのとき私が常に軸足に置いていた言葉が「命や健康が第一」です。

子どもや職員にとって命や健康に勝るものはありません。感染リスクを最大限防ぐために、時にはやらない決断をする。そしてやらない決断だけでなく、どうしたらできるのかを工夫して行事等を実施し、生徒の心身の健康や学びを保証してきました。今後も決断に対する全ての責任を受け止める覚悟で生徒に説明し、保護者や地域の皆様のご理解を得ながら進めていきたいと思います。

先生方にとっても同様です。命や健康より大切な仕事などありません。朝早くから出勤し、夜遅くまで、授業準備や生徒指導等、子どものために熱心に力を注ぎ、たとえそれが本人自ら進んでやっていたことだとしても、命を削り、教師生活を縮めてしまっては何もなりません。先生も生徒も心身ともに健康でゆとりをもち、毎朝笑顔で向き合える健全な学校を目指していきたいと思います。

「たった一言」の重み

「中3の時先生に、〇〇が上手いと褒められ今の仕事につきました」教え子との再会で初めて知った事実でした。教師の発した「たった一言」が、生徒の人生を大きく左右することがあります。教師の発したたった一言に、ある生徒は心を救われ、前向きに進もうとします。教師の発したたった一言に、ある生徒はやる気を失い、自信を無くしていきます。我々教師は「たった一言」の重みを自覚し、目の前の生徒に声をかけていくことが大切だと実感しました。生徒に対してどんな言葉をかけるといいのか、そのためには、一人一人の生徒が今置かれている状況を多面的にとらえ、生徒の今の気持ちを理解しようと努力しなければなりません。落ち込んでいる生徒が暗い気持ちから脱出し、力強く前に歩みだすために「心に残る一言」をかけてあげたいものです。

個々が生きる「チーム力」

東京オリンピックでの活躍で注目を集めた日本の女子スケートボードの選手たち。個々の若い選手が堂々と自分らしさを発揮していました。私は彼女たちが互いの活躍を喜び抱き合う姿を見て、互いをリスペクトしあう素晴らしい「チーム力」を感じたのです。

日本には昔から日本的な集団主義、組織主義があります。個性を殺して集団を優先し、一人一人が集団に従うことを美徳としてきたものです。個人の能力を活かすことは自分勝手であると嫌われ、自分の力は押し殺して、集団としての力を発揮しようとしたものです。しかし、彼女たちはむしろそれぞれの能力をオープンに発揮し、またそれを仲間同士で励まし、支えるチームになっていたということだと思います。金メダルが取れなかったとしても、選手は「くやしい」と言い、「チームに申し訳ない」と言う必要はないのです。

学校は「チーム力」が必要な組織です。学校の教育目標に向かって、我々職員が個々の持ち味を結集し、チーム力を発揮して教育効果を高めたいです。また、生徒にとって学級は自分のチームです。自分らしさを発揮し合い、仲間のよさを認め合い、支え合い、高めていける集団づくりを大切にしたいです。

各小中学校の学力向上推進　　～学校訪問を通して（その２）～

学力向上推進リーダー　中村　勝（泉小学校 教頭）

２学期も引き続き、学力向上推進リーダーとして、市内各小中学校の教育長訪問に同行させていただだております。新たに訪問させていただいた学校の授業参観、教務主任や研究主任の先生方との懇談から学んだ、各校の研究やその取組、指導法について紹介していきます。

他校の実践を知ることで、ご自身の学校の研究について見つめ直したり、教育活動に取り入れてみたりすること…。それが、紹介させていただいた学校への恩返しになると考えます。

さて、前号の「教育とき ～学校訪問を通して～ 」では、

①研究を進めていく上での根本となる「自己有用感の高揚」を図ることが大事にされていることで、学校が子どもたちにとって「心理的安全な場所」になっている

②「『何』を課題とし、『どのような指導・振り返り』を行えば、『できた』『分かった』を実感することができるのか」、研究の内容や成果・課題が全職員で共有されている

ということが、どの学校でも進められているとお伝えしました。「子どもたちが安心して学ぶ環境が整い、その上で研究が進められ、子どもたちの学力向上に直結していく土台が整っている」ということです。２学期からの授業実践においても、学力向上の土台となるこの部分は欠かせないものとなっているはずです。

さらに、１学期の実践紹介では、どの学校でも「ＩＣＴ機器を活用した授業」を大事にされていることが分かりました。2 学期は、課題化、終末の振り返りに加えて、ＩＣＴ機器の効果的な利活用についても、本稿にて各校の取り組みを紹介していけたらと思います。

今回は、９・１０月の訪問校について紹介します。

【肥田小学校　９／１４】

【研究主題】
どの子もわかる、できる、深まる授業づくり
～主体的・対話的な活動を通して～
【研究内容１】
見通しや課題意識がもてる導入の工夫
①主体的な学びを生み出す事象提示と課題設定
②見通しをもたせ、粘り強く取り組ませるための仕掛け
【研究内容２】
仲間と考えを深め広める対話的な活動の工夫
①目的や方途を明確にした話合い活動
②考えを整理し、広め深める教師の手立て
【研究内容３】
学びを自覚し、よりよい自分を実感できる終末の工夫
①単位時間にめざす姿の定着状況の見届け
②学びの成果を振り返り、自己の変容を自覚する自己評価

肥田小学校では、「土岐市スタンダード授業」をもとに作成された『肥田小学校スタンダード授業』により、全職員に「導入＝7 分以内」「展開＝28 分」「終末＝10 分」という一単位時間の流れが共通理解されていました。特に「個人追究＝5 分」とし、個人の考えをもてるようにしています。さらに、その後の交流で深めた考えをまとめ、「できた」「わかった」の実感ができるよう、終末（振り返り）の時間の確保が徹底されていました。

また、追究場面に「対話活動」が位置付けられていました。特に注目したのは、「３人交流」です。２人では「教える側」と「教えられる側」に分かれてしまうことが多いという学校の課題から、「３人交流」にすることで、活発な話し合いにつながり、より考えが深まっていくととらえ、実践を進めていました。

【泉中学校　１０／６】

【研究主題】
生徒を学びの主役とする授業
【研究内容１】
資質・能力を育むための学習活動と評価を明確にした単元学習計画表の作成
①単元や題材の目標達成を目指し、生徒が解決までの見通しをもちながら、課題を追究し続けるために必要な単元や単位時間の学びの設計
②指導と評価の一体化を図るために、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した評価の場面や方法の明確化
【研究内容２】
生徒が学びの主役となる学習活動の工夫
①生徒が課題意識と解決までの見通しをもって追究するための導入の工夫
②生徒が主体的に追究するための学習活動の工夫
③生徒が成長を実感する工夫

泉中学校では、「生徒を学びの主役」を掲げ、研究に取り組まれています。「生徒が主役」は「子どもたちの主体性」が発揮されなければ実現しません。まさに、学習指導要領に掲げられている目指す子ども像です。

そのために、泉中学校では「生徒が主役」というのはどういう姿なのかを、各教科部で明確にされています。研究内容を具体化することはもちろん大切なことですが、その根本となる「研究主題」の目指す姿はどういう姿なのかを考え、共有化していくことが子どもたちの実際の姿に現れるといっても過言ではありません。それが、子どもたちのアンケート結果にも表れており、「(各教科の) 学習が好き」「(各教科の) 学習が分かる」どちらの項目においても、「はい」と答えている生徒が７割を超えています。これは、「子どもたち一人一人が主役となって学習に取り組んでいる証拠」と言えるでしょう。

指導の結果が子どもたちの姿になって表れることが、研究の喜びと言えそうです。

【肥田中学校　１０／１２】

【研究主題】
どの子もわかる、できる、深まる授業づくり
～主体的・対話的な活動を通して～
【研究内容１】
見通しや課題意識がもてる導入の工夫
①生徒の実態を把握し、必然性のある課題を設定する。
②導入資料、問題（問い）、実験などを用いて、生徒の「やってみたい」「なぜだろう」という思いを引き出す。
【研究内容２】
仲間と考えを広げ深める対話的な活動の工夫
①「何のために（目的）」「何について（テーマ）」「どのように（形態）」話し合うのか、話し合った後「どのような活動をするのか」を明確にした対話的な活動を行う。
②個々の意見をつなぎ、実感を伴ったまとめを引き出す展開や教師の発問を工夫する。
【研究内容３】
学びを自覚し、よりよい自分を実感できる終末の工夫
①本時の目指す姿に到達したかを振り返る場を授業の終末に位置付ける。
②自分がわかったこと・できたことを振り返り、変容に気付かせる自己評価を工夫する。

研究主題が肥田小学校と共有されていることから、小中９年間で子どもたちを育て、学力を高めようとしていることが分かります。その具現に向けて、「スタンダード授業」が大切にされ、特に、「まとめの時間の確保」が重視されていました。土岐市の重点である「できた」「分かった」を実感する終末の振り返りをするために、まずは、「時間を保証する」ことが必要であることを改めて実感しました。

子どもたちが、振り返りを通して「できた」「分かった」を十分に実感できること、それが結果的に次時へのやる気、つまりは課題化につながっていくのだろうと考えます。

これを小中で連携し、継続して指導することで、研究主題に示した授業が実現されていくのだと思います。

【土岐津小学校　１０／１７】

【研究主題】
主体的に学習に取り組む児童の育成
～教科指導における効果的なＩＣＴ活用を通して～
【研究内容１】
指導計画の工夫
①各単位時間の役割を明確にした単元構成の理解
②主体的に取り組める学習活動の設定
【研究内容２】
効果的なＩＣＴ活用の在り方
①発達段階に応じたＩＣＴの活用。
②教科の特性を配慮したＩＣＴの活用
③指導段階に応じたＩＣＴの活用

土岐津小学校では、学力向上のためのタブレットの活用について研究を進めています。土岐市スタンダード授業と照らし合わせ、活用場面や方法を考えながら実践しています。「まずは使ってみる」から、「授業のねらいに応じた効果的な利活用」にレベルアップしていると感じました。

授業では、児童の実態や発達段階、ねらいに合わせて活用が工夫されていました。低学年の道徳の授業では、導入時に学校の様々な場面を写真で提示し、主題に対する関心を高めることにつなげていました。高学年の授業では、終末で学んだことをもとに写真をグループ分けしました。本時の学びを生かし、一人一人が根拠をもとに考えまとめる姿がありました。また、プログラミングを活用した音楽づくりや、考えづくりの資料としての活用、音声を録音して客観的に振り返るなど、１時間の授業の中でも様々な活用場面がありました。

ＩＣＴ機器の活用が日常化していると実感しました。「攻める」実践が、学びの質を高め、「できた」「わかった」をより実感できる授業になっていくのではないかと感じました。

【泉西小学校　１０／２４】

【研究主題】
自己を見つめ、よりよい生き方について考えを深める児童の育成
【研究内容１】
道徳の授業を要とした全教育活動を通した道徳教育の推進
①他の教育活動を意識した年間計画の見直しと改善
②別葉を活用した道徳教育の推進
③全教育活動における自己みつめの充実
【研究内容２】
多面的・多角的な思考を引き出す指導の工夫
①他者理解を通して価値理解や自己理解を深める工夫（発問・対話）
②考えが変容した児童の位置付けや自己みつめの場の工夫

泉西小学校の研究の中心は「道徳」で、中でも特に重視されているのが「自分の考えをもつこと」です。資料の「見える化」、（ロイロ）ノートへの考えの「文章化」、問い返しによる考えの「深化」。授業ではその深化した考えが終末で活発に交流されており、まさに多面的・多角的な思考が生み出されていました。

今年度は、今までの研究の成果をもとに、道徳科の「泉西スタンダード」が作成されます。

「泉西スタンダード」とは、
・『導入』における事前アンケート等により、「何について考えるのかが分かる」。
・『展開』の前段では、資料の主人公について、後段では自分事として考えられるように問題を投げかける。
・『終末』においては、導入時と比べて意見がどう変わったのか、自己の考えの変容に気付く。

というものです。

泉西小学校のさらなる道徳科の研究推進、そして他教科への活用につなげることで、『自己を見つめ、よりよい生き方について考えを深める児童』が増えていくと思います。

【学力向上推進委員会の取り組みから】

令和４年度　泉西小学校の実践報告

学力向上企画委員　泉西小学校　平林　尚子

泉西小学校では、道徳科の授業を中心に、土岐市スタンダード授業の重点である、以下の２点を意識した授業づくりを行っている。

１　「やってみたい」を生み出す具体的な課題

本校では道徳科の学習において、教材を通して学んだことを、より自分事として捉えられるようにする工夫を考え、実践している。導入では、ねらいに関わる場面や資料を提示し、児童が「本時は何について考えるのか」を理解できるようにし、課題を設定している。

＜導入の例＞

・ねらいに関わる児童への事前アンケート
・日常の場面を取り上げる。
・既習内容を想起させる。　　　　など

⇩

「私とみんなの考えが違った。どうして、〇〇しないほうがいいんだろう。」
「〇〇みたいな時、自分ならどう思うかな。」
「今日は、〇〇について考えればいいんだな。」

２　「できた」「わかった」を実感する終末の振り返り

〇導入に立ち返って自己を見つめる

導入で意図的に提示した場面やアンケート結果を活用して終末の自己見つめを行うことで、資料から離れて自分事として捉え、日常の自分を振り返ることができたり、自己の変容に気付いたりする姿が増えている。

〇深い学びを見える化する

互いの意見を交流する際、ただ聞いて終わるのではなく、仲間の考えや感じ方を理解して自分の考えと比べたり、もう一度考えを見つめたりする場や教師の問い返しを意図的に位置づけている。そうすることで、終末の自己見つめでは、「最初は〇〇と思っていたけれど、△△さんの意見を聞いて、今は□□することが大事だとわかりました。」と、児童が自己の変容を自覚（見える化）できるようにする。

【写真：終末に向けて互いの考えを交流している様子】

３　今後の実践に向けて

◎課題意識の持続化

課題設定の時点では、「今日は〇〇について考えてみよう。」という意識があるが、ねらいに迫る段階で課題に対する意識が薄れる児童が見受けられる。十分に他者理解をした後に、ねらいに迫るための問い返しや学習形態を工夫することで、課題意識の持続化を図りたい。

◎実践力につながる自己見つめ

道徳科の時間には、価値について理解し今後の自分について考えていても、日常生活で行動として発揮されることがまだまだ少ない。学校生活や行事などにつなげて、生きて働く道徳的実践力の向上を図りたい。

【学力向上推進委員会の取り組みから】

令和４年度　駄知中学校の実践報告

学力向上企画委員　駄知中学校　宮本　真実

駄知中学校では，土岐市スタンダード授業を参考に，次の２点を意識した授業づくりを実践している。

①課題から終末の活動（まとめ）まで一貫した授業づくり
②生徒が主体的に取り組むための工夫

１　「やってみたい」を生み出す具体的な課題

英語科の実践では，「学級全体でペンが何本あるのか調査しよう」という身近な内容を課題に設定することで，興味をもって取り組めるようにした。生徒たちは人数や自分が持っているペンの本数から予想を立て，積極的に“How many ~?”を使って質問したり，自分のことを答えたりしていた。習得させたい言語材料を必然性のある形で使用することで意欲が高まった。

【写真①】英語での交流の様子（１年生）

数学科の授業実践では，導入時に前回の授業を振り返ったり，前回と今回の問題の違いを確認したりすることを通して，生徒から本時の課題を引き出すようにしている。生徒自身が考えて課題化することで，本時に学ぶ内容が明確になり，生徒自身が「今日はこの問題を解けるようにしよう」と意欲的に取り組むことができた。

こうした実践により，全国学力・学習状況調査の質問紙「課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組んだ」の項目において，「当てはまる」と回答する生徒が昨年度より，約１３ポイント増加した。

２　「できた」「わかった」を実感する終末の振り返り

本校では，昨年度から「課題から終末の活動まで一貫した授業づくり」に取り組んでいる。

理科の実践では，授業の終末に確認テストを実施することで，生徒自身が１時間で習得した内容を確認したり，「できた」と実感したりすることができた。また，体育科の実践では，毎時間振り返りシートを書くことで，単元を通した自分自身の伸びを実感したり，次時に向けた具体的な目標を設定したりすることができた。

このような実践から，全国学力・学習状況調査の質問紙「内容について，分かった点やよく分からなかった点を次の学習につなげる」の項目において，「当てはまる」と回答する生徒が昨年度より，約７ポイント増加した。

３　今後の実践に向けて

昨年度の課題であった，「生徒が課題意識をもち，より主体的に解決しようとする授業づくり」に関しては，生徒の視点に立って活動を工夫したり，課題化したりすることで，改善されつつある。今後さらに実践していきたい点は，以下の２点である。

①ＩＣＴの有効な活用方法の検討・共有
②終末の見届けの工夫と継続

①については，ＩＣＴ機器を使用する場面や使い方を精選し，学力向上に生かしていくことが大切である。②については，実践を継続することで，さらに成果を高めていく。また，教科によって，どのような終末の確かめができるかについても考えていきたい。どちらも学校内で実践を共有していくことで，共通意識をもって取り組んでいきたい。

令和４年度の ICT 教育推進について　　学びのＩＣＴ支援室

令和4年度　土岐市ICT教育推進目標

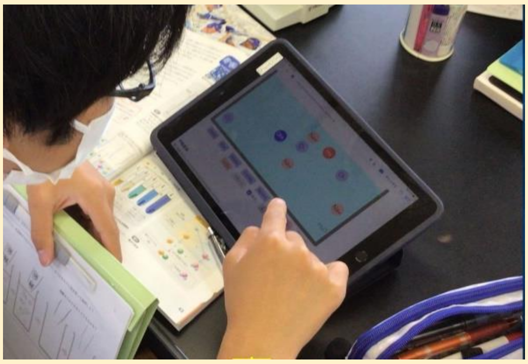
ＩＣＴ機器の効果的な活用を通して、「子どもたちの主体的・協働的な学び」と「どの子もわかりやすい授業」を実現する

令和４年度　土岐市 ICT 活用指標

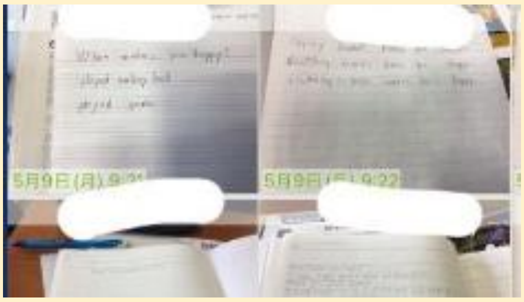
【９月から３月の活用目標】
ＩＣＴを様々（個別学習、協働学習）な活用方法で利用できる。

ＩＣＴ推進担当の先生からの報告をもとに、各学校での実践を紹介します。

個 別 学 習

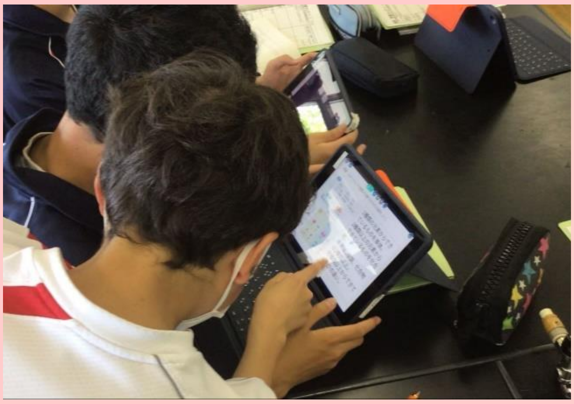


【理科】
プログラムを使ってイオンの化学変化の様子を視覚的に捉え、理解を促す学習活動に取り組みました。ＩＣＴの活用で、具体的にイメージできるようになり、子どもたちが自分の考えをもつきっかけとなりました。

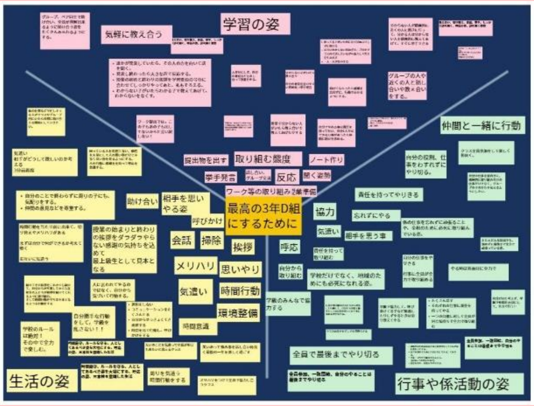


【英語】
先生が英作文の課題を与え、生徒がロイロノートで提出しました。先生は提出状況と内容について瞬時に把握し、提出できていない生徒については、個別に机間指導に回りました。提出された内容について、すぐに添削することで、生徒へ素早くフィードバックできました。生徒は英作文の表現が適切かどうかをすぐに学ぶことができました。

協 働 学 習



【理科】
個人の考えを、図表を指し示して説明していました。「書き込む」「動かす」など、相手に内容が伝わるよう生徒が主体的に説明していました。



【学級活動】
学級として目指す姿を、ロイロノートの「共有ノート」にグループごとで同時に書き込みました。内容ごとに分類することで思考が整理され、話し合いが充実しました。

ＩＣＴの効果的な活用について、先生方が試行錯誤された実践が積み上げられています。学びのＩＣＴ支援室として、様々な実践を共有し更なる推進を目指しています。

「心にひびく言葉」

「私だって泣くよ、心の中で」

濃南小・中学校　副校長　長瀬 久美子

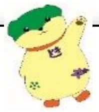
　教室へ向かうと、部活動を終えた彼女が「あっ先生来た!聞いて!」と話を始めます。制服やかばんを片付けながら、テストで予想以上の点数が取れた、次の試合にレギュラーで出場できる、と彼女の話は止まりません。私は「すごいね、頑張ってたもんね。」などと相槌を打ちながら話を聞くのです。いつも明るく前向きに努力し続ける彼女の話を聞くことで、私はその日一日分のパワーをもらっていたように思います。おしゃべり好きの彼女は、聞き上手でもありました。彼女に話を聞いてもらってすっきりした子や立ち直ることができた子もいました。太陽のようにキラキラ輝き、周りの仲間にあたたかく接する生徒でした。

　そんな彼女が、私の所へ来なかった日がありました。特に気になる様子もなく、話すネタがなかっただけだと思っていると、次の日にはいつもの彼女に戻っていました。前日のことを尋ねると、「先生、私だって泣く時あるよ、心の中でね。」と彼女は言うのです。何があったかは絶対に言えないけれど、もう大丈夫だ、とのことでした。

　いつも元気で悩み事などない子だ、と決めてかかっていた私には､返す言葉がありませんでした。

　きっとサインを出していた彼女、そんな彼女の小さな変化に気付けなかった私。いつも誰かの太陽だった彼女、そんな彼女の太陽になれなかった私。情けないやら申し訳ないやら、モヤモヤした気持ちの私に、その日も太陽は輝いていました。

掲　示　板



【令和４年度　土岐市美術展幼少年の部　審査員総評】

＜平面作品の部：肥田　雄二郎 先生、樋口　一成 先生＞

◆**小学生**：全体的に多彩な色使いで、線や形ののびやかさが感じられる作品が多かったです。低学年は見て描くより、思いで描いて明るくのびやかな作品になっていました。高学年になっていくにしたがい、よく見て描く写実的な作品になり、発達段階に応じた先生方の題材設定の豊かさを感じました。

◆**中学生**：靴や自画像は対象をよく観察して描かれていました。基本は対象をよく見ることです。そこから空想などの世界が広がっていきます。花や手を描く時も基本的には観察が大切です。丁寧にねばり強く描かれた作品ばかりで、完成度がとても高かったです。

＜立体作品の部：下総　平五 先生＞

◆**小学生**：思い通りになりそうな粘土ですが、手強いところがあるのが粘土細工です。作品を高くしようとしても、へたってしまったり変形してしまったりします。その手強さこそが感性を磨き高めていきます。作品を通して、想像を膨らませ、楽しく作品づくりをしている姿が伝わってきました。体ごと粘土にぶつかるような体験を大切にしてほしいと思います。

◆**中学生**：時間のない中でも、作品づくりに徹底的にこだわっていることが伝わってきました。無限に広がる自分のイメージを作品で表そうとしているようでした。技法を駆使して細部まで製作している作品から、没頭して粘土に向かっていることを感じました。

＜書写作品の部：新井　龍峰 先生＞

◆**小学生**：のびのびと、元気よく書けています。一文字一文字、しっかりと最後まで書けていて、ねばり強さを感じる作品が数多くありました。作品に対して、氏名をもう少し大きく書くと、より力強い作品になります。

◆**中学生**：しっかりとした筆づかいで、素晴らしい作品が数多くありました。起筆、終筆が的確にできていて、運筆ものびやかな作品が多数ありました。氏名も作品に合わせて、もう少し大きく書くとよいです。

【お知らせ】

◇本号より教育ときの HP 掲載が、既刊号も含めて研究所の HP から土岐市の HP に移行されています。

編集後記

保護者とのよき関係づくりと丁寧な説明を行いながら、関係諸機関と連携を図って学校体制で特別支援教育を今一度考えたいものです。(P2)　校長先生のゆるぎない信条は学校の姿に反映していると感じます。「安全・安心は全ての教育活動の前提」とも言われます。(P3)　10.11 月、多くの学校の研究発表会もありました。やれそうなことを一つでもやってみること。そして、子どもの姿が変われば、教師力アップです。(P4～)　自分を素直に見つめる謙虚さ。頭が下がります。(P10)